

【論 文】

学生のボランティア活動を活性化させるための取り組み I
～ アセスメント報告「学生のボランティア事情を中心に」～

Efforts to activate the students' volunteer activities I
～ Assessment Report Current status of student volunteers ～

中村 卓治
Takuji Nakamura

(プロジェクトメンバー)
小川真史 西山美香 太原牧絵

キーワード： ボランティア 対人援助 現場実習 継続活動 振り返り

アブストラクト：学科内のボランティア活動を活性化・定着化させるべく、学科 BMS（文教マネージメントシステム）である「実践力育成に資するための学習支援プログラムの企画と実践」の活動プログラムの一環として、「ボランティア活動のコーディネート」のプロジェクト（通称：「ボラぐせ」プロジェクト）が 2011 年度に立ち上げられ活動を開始した。今回は当プロジェクトの中間報告として、対象学生に実施したボランティアと現場実習に関するアンケートの集計結果を基に、今後のプロジェクト活動の役割について検討を深める。

1 はじめに

1) 当プロジェクト立ち上げの理由

本学人間福祉学科では、平成 24 年春の段階で 9 期にわたる卒業生を輩出してきた。その大多数の者は福祉の専門職として就職し、福祉・医療現場で幅広い活躍を続けてきている。彼女たちの援助実践や仕事に対する姿勢は県内外の関連業界や、所属先から高い評価を受けており、本学科の教育の方向性が間違ったものではないことへの確信と、在校生たちにとってのよき道標としての役割を果たしてくれている。

そうした喜ばしい状況の一方で、ここ最近、学科教員として懸念する兆候が学生達に現れ始めている。

まず一点目は、ボランティア活動を行なう学生の減少である。日本学生支援機構の調査(2009)によると、ボランティア活動に関する部署を持つ大学等は 8 割強あり、「ボランティア情報の収集・提供」の役割を担っているという。本学では学内・学科にボランティア情報の掲示板が設けられてはいるが、対人的な働きかけはサークルが教員個々の役割に求められているのが現状であり、学生のボランティア活動の状況を総合的に管轄・支援する確固たる場所は設けられていない。そうした体制も原因のひとつと考えられるが、ボランティア活動を行う者の減少の影響は、代々学科学生達に受け継がれてきた学科の名物活動や恒

例のボランティア企画等にも現実的に影響を及ぼし始め、運営がままならない状況にある。

二点目は、現場実習に関する問題である。具体的には現場実習前後に高い負荷を示し、実習直前で体調を崩し実習中止・延期となるか、実習後にコースの履修を諦めてしまうケース。あるいは、利用者やスタッフと適切な関係が築けないケース。中には単に利用者に話しかけることすら出来ない者もある。大多数の者はそれなりに現場実習を終えて帰ってくるのであるが、そうした傾向を持つ学生達が以前にも増して徐々に増えつつある。

しかし現場実習でかかわれない学生や負荷を高める学生の出現は、単に個人の資質だけが原因であろうか。あるいは現場実習後にコース履修を諦める学生は、自らの適正だけが問題だったのであろうか。そもそも現場実習は学生たちの日常生活とは大きく異なる環境のもとで、特別な作業を強いられる。特に日常生活においてケータイやパソコンなどの IT 媒体の多用により間接的コミュニケーションに慣れている者にとって、他者と直接関係を築くという体験もストレスフルなものであろう。さらに、福祉の現場は個々に複雑な事情をかかえた利用者を理解し支援することが目的とされる。そこには、学生自身の資質とは別の、対人援助の専門性が求められる状況が人によっては負荷を高めることになる。

こうしたことから見ると、本学園内における生活適

応能力を、そのまま現場実習における環境適応能力に置き換えて考えることには無理がある。教員から教示される教育をそのまま真摯に受け止める姿勢と、自らが主体的に活動しなければ物事が進展しない現場実習とでは、各々に求められる力が異なるのである。

こうした現場実習でのかかわれなさに対する解決策として、ボランティア活動への取り組みがあげられる。荒木ら(2012)は「ボランティア活動での様々な経験を通じて、学生は自己の将来像や職業イメージを具体化し、福祉専門職に向けて学習や実習への意欲を高めることができる」とし、馬場ら(2006)も「学生は、ボランティア活動を通して自分のもつ力に気づき、その結果、活動すること、相手を思うこと、そして尊重することを体験を通して学び、また意識を向上させていく」と職業選択や自己理解の面からも活動の有効性を説いている。

しかし、このように現場実習に役立つとされるボランティア活動は、先に述べた通り、当学科においては現状課題のひとつとなるため、学生の成長のための手段として活用するためには活動を活性化させる何らかの取り組みが必要となる。

そこで、学科教員として学生たちのボランティア活動を後押しすべく、学科BMS「実践力育成に資するための学習支援プログラムの企画と実践」のプログラムのひとつとして「ボランティア活動のコーディネート」を2011年度より立ち上げることとなった。学生が、ボランティア活動を生活の身近なものとして位置付けることを目標とした当活動は、通称「ボラぐせ」プロジェクトと命名され、筆者を筆頭に4名の学科教員で構成された組織で、おおよそ三年計画でボランティア活動の活性化に取り組むこととなったのである。

2) アセスメントの視点

先行研究ではボランティア活動の有効性は説かれているものの、前述したように本学科ではその活動の活性化が課題となっている状況にある。そこで、その解決に向けた当プロジェクトの具体的な活動の実施にあたり、アセスメント作業として学生にアンケートを実施し、学生たちのボランティア活動状況と共に、現場実習に対する状況を把握することにした。

また、当学科学生は社会福祉学を学ぶという点では皆共通しているが、各学年により学習の習熟度は異なるため、アンケート対象者の学習条件を揃えた上で、ボランティア活動と現場実習の感想を拾い上げることにした。

さらに、単年度調査では、その学年独自の文化や指向性といったものの影響が考えられるため、複数年にわたり同一のアンケート調査を実施し、当プロ

ジェクトの活動効果を検証するための下地となるデータの収集に努めた。

3) アンケート調査項目の基準

調査ポイントの統一と共に検討を要する項目として、ボランティア活動の内容の統一が挙げられる。

ボランティア活動は求められる内容が多岐にわたる。支援対象者と直接かかわる対人援助形式のものもあれば、直接人とかかわる形ではないものも多い。本来、ボランティア活動の内容に差を付けるべきではないが、本学科が担うべき実践力育成が対人援助に資する力であるとすれば、調査対象となるボランティア活動もまた、利用者とは直接かかわる形式、いわゆる対人援助型ボランティアに焦点を絞って調査する必要がある。

もう一方の視点としては、ひとつのボランティア活動にかかわる頻度(回数)である。ボランティアは大別すると2つに分けることが出来る。ひとつは福祉施設で実施される夏祭りの補助といった一度きりのかかわり。もうひとつは、定期的に同一の施設や組織にかかわる継続性のあるものである。

ボランティア活動は、経験しないより経験したほうが良い。それが一度きりのものであろうとも、自らの日常生活ではかかわりの持ちにくい福祉対象者と、普段自由に出入りできない施設内で時間を共有する体験は、その後の現場実習や就職活動に何らかの影響をもたらす可能性がある。反面、一日や一回限りのかかわりは、利用者やスタッフとのしっかりとした関係形成や対象理解の洞察までには及びにくい。そのことを勘案すると、現場実習で問題となる前述の「かかわれない」といった状況改善のためには、継続したボランティア活動を体験することが重要となる。

こうしてボランティア活動の状況を、利用者等との「直接的なかかわり」及び「継続したかかわり」という2点に絞り、当プロジェクトが働きかけを行なう前の学科学生の現状をアセスメントすることから、プロジェクトの活動を始動することにした。

2 本論

1) アンケートの実施

前述の理由を基に、アンケートの内容を二つに大別した。ひとつはボランティア活動の実態把握に関するもの。特に「利用者等に直接かかわりを持つボランティア活動」の状況に関してである。もう一点は、初回現場実習の感想についてである。実際の現場実習の評価項目を参考にしながら、現場実習のどのような点に難しさを感じたかを中心に回答を求めた。

なおアンケートの実施は、初回現場実習を終えた

直後に、対象学年となる三年生全員が履修する授業の終わりに実施した。

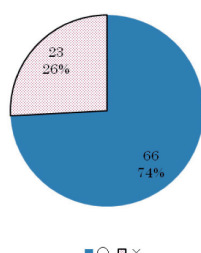
2) アンケートの集計結果

この度報告するアンケートの集計結果は、2011年度(43名)および2012年度(46名)実施分を合わせた計89名分のものとなる。以下、質問項目ごとに結果について説明する。

(1) 利用者に直接かかわりを持つボランティア活動の経験の有無

図1によると、過去の体験も含め、経験者は全体の約75%、すなわち対象学生の4人の内3人は、利用者に直接かかわりを持つボランティア活動を体験している。

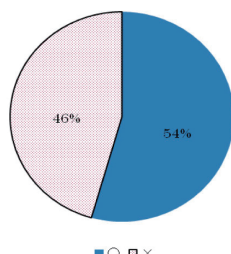
図1. ボランティア活動参加経験の有無



(2) 上記の経験者のうち、同じ活動を2回以上継続して行った者の割合

図2によると、利用者に直接かかわりを持つボランティア活動を継続して行った経験を持つ者は、(1)で「有る」と回答した者の内の54%にあたる。ちなみに対象全体からすると、40%の者が該当することになる。

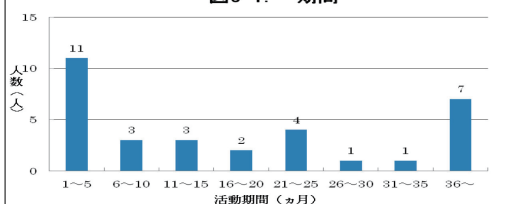
図2. 2回以上の参加の有無



(3) 同じ活動を2回以上継続して行った者の活動の期間

図3-1によると、同じボランティアの活動継続期間は1～5ヶ月までが最も多く34%、次いで3年以上継続している者が22%と続き、活動継続の期間には幅がある。

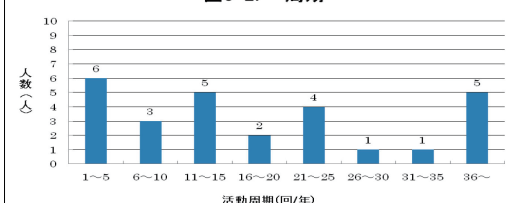
図3-1. 期間



(4) 同じ活動を2回以上継続して行った者の活動の周期(頻度)

図3-2によると、同じボランティアの活動回数は、年に1～5回までの者が22%と最多であるが、年に36回以上活動している者も僅差で次点(19%)にあるように、活動の頻度にも大きな幅があり様々である。

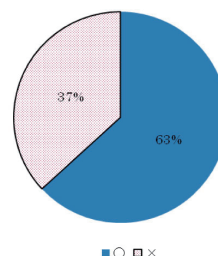
図3-2. 周期



(5) 上記のような継続したボランティア活動を、3年次以降も(現在まで)続けている者の割合

図4によると、継続ボランティア経験者の内、現在も同じボランティア活動を継続している者は63%。

図4. 現在も参加しているか



(6) 継続したボランティア活動は、現場実習において活かされたと感じた者の割合、またそのように実感した項目

図5によると、継続ボランティア経験者の内、継続してボランティア活動を行った経験が、現場実習に活かされたとする者は72%。多くの者が、継続ボランティアの経験が現場実習に何らかの形で反映されたことを実感している。

また、その実感として多くの者が選んだ具体的項目は、図6にみえるように、①利用者との関係づくり、②利用者に対する理解、③利用者の支援に関する理解、④専門職に対する理解、⑤自分自身に対する理

解、スタッフとの関係づくり(同率)へと続く。(複数回答有)

これらの選択項目は、一度や二度のかかわりでは決して獲得できない内容であり、利用者やスタッフとのかかわりに時間をかけ、共有体験を積み重ねながら理解を深めるといった継続した関係性の成果であるといえる。

図5. ボランティアは活かされているか、いないか

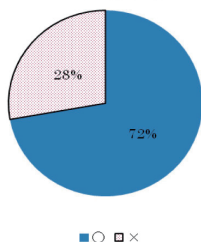
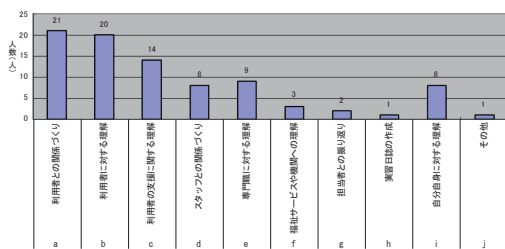


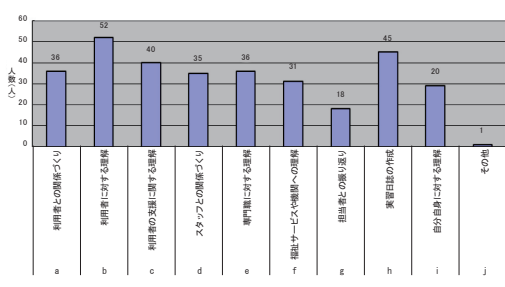
図6. 活かされた理由



(7) 現場実習において難しさを感じた項目

最後の項目は、対象全員に対しての質問である。上記(6)の項目とまったく同じものを選択肢にそろえ回答を求めたところ、図7のように①利用者に対する理解、②実習日記の作成、③利用者への支援に関する理解、④利用者との関係づくり、専門職に対する理解(同率) ⑤スタッフとの関係づくりと、継続ボランティアで恩恵を感じたとされる前述の上位項目の多くと重複するといった興味深い結果が出た。このことから、継続ボランティアの活動は、現場実習において何らかの形で成果が現れることが推考される。

図7. 実習での難しさ



3 まとめ

1) アンケート調査からみる学科学生の動向

今回の調査を通して、4人のうち3人はボランティア体験をしていること、さらに4割の者は利用者に直接かかわりを持つボランティア活動を継続的にやっていることが判明し、学生のボランティア離れが、極端に学科全体に進行しているわけではないことがわかり安心した。また、ボランティアとしての継続的なかかわりが、現場実習における負荷の高い項目をカバーできることも明らかとなり、これからの当プロジェクト活動の方向性や役割が見えてきたことも収穫であった。

しかし、冒頭で述べたような、現場実習においてかかわれない、自ら行動を起こせない学生たちが徐々に増えていることや、本アンケート結果の裏を返せば学科学生の4人に1人は対人援助的なボランティア活動を一度も行うことなく現場実習や就職活動に臨もうとしている現状を合わせ考えると、ボランティア経験を積み重ねながら力をつけていく学生と、その一方で他者とのかかわりに負担を感じ続けている学生との対人援助における力の乖離は明らかである。森(2002)や河井(2012)らの研究では、学業とボランティア活動を両立している者ほど、大学生活を密度の濃いものにしようとする意識が強く、よく学習して、知識・技能を身につけているとされる。このようにボランティア活動の有無は、単に余暇をどのように使うかといったものではなく、学生生活全体の充実感や学業の吸収量にも反映することを踏まえると、ボランティア活動の経験の差異はとてつもなく大きなものとなる。中には、アルバイトの忙しさを理由にボランティア活動を行いにくい理由に挙げる者があるが、荒木ら(2012)の研究により、アルバイトの存在がボランティア活動に大きく影響するものではなく、要は本人の意識の問題であることが明らかになっていることも補足しておく。

今回は2年分をまとめて報告したが、実は年度において集計結果に開きが見えることが明らかとなった。個々の項目結果の傾向はどれも同じであるが、例えば「継続したボランティア活動は、現場実習において活かされたと感じるか」という質問項目では、「活かされた」と回答する者は2011年度が56%であるのに対し、2112年度では85%と実に30%も増え、ほとんどの対象者が成果を実感するにいたっている。このことから、単年度だけでの傾向把握だけでなく、複数年度にわたる継続調査及び傾向分析の重要性を実感した。

さらに、今回のアンケート対象学生達には、それ以前には無かったフィールドワーク演習が必修科目と

して設定されている。当科目のプログラムによってはボランティア活動に近い内容のものも用意されているため、そこでの体験が対象学生たちのボランティアに対する意識に影響を与えている可能性は無視できないところである。

2) 支援の方向性 その①

－ ボランティア活動を継続することの重要性

今回、学生のボランティア事情をアセスメントする中で、継続したボランティア活動が、対人援助を学ぶ現場実習においても経験として活かされてくることが明らかとなった。

河井(2012)は、「ボランティア活動になるべく多く継続的に参加することが、様々な機会を経験することになり、その体験を通して関係性や課題遂行能力及び専門知識・技術を習得してだけでなく、その学生の人生の足場となりうる」と、継続的活動の効果を説いている。

日常生活において、われわれは他者とできる限り良好な関係を保ちたいと願うし、実際に短期間であればよい面を見せながらつきあい続けることも可能である。さらに関係を深め続けければ、緊張や警戒感は薄れ、次第に心理的距離が縮まるといった関係の深化を始める。その反面、必要以上に心を寄せすぎると、場合によっては相手に対する甘えや依存が発生したり、時に許容以上に自己に踏み込まれることに拒絶反応を示すこともある。良いも悪いも、そのどれもが関係を継続したことで見せる反応である。対人援助においては、そうした反応や行為を見せる素の利用者をありのまま受容し理解するための関係構築が求められ、さらに利用者の状況をどれだけ客観的に捉え、専門的に対処する術を持ち得ることができるかが援助の上で重要にもなる。よって、その専門性の延長線上にあるボランティア活動において上辺の関係や無難な関係をどれだけ長い期間保てるかなどではなく、利用者の本音をどれだけ引き出し、心理的に追い込まれながらもその状況にしっかりと対峙できるかが、ボランティア活動を継続する者の対人援助の力となり得るのである。

冒頭でも触れたように、ボランティア活動はやらないよりは単発でも経験した方が良い。あるいは対象者と直接対面せずとも、自らが行う社会貢献が間接的にどのように社会に還元されるのかに思いをはせながら、無理せず続けるボランティア活動もまた貴重なものである。しかし、やはり対人援助職を目指す者としては、世代や文化の違い、自分とは事情の異なる人々と、直接関係を深める訓練は必要である。ボランティア活動を通して関係の継続性から見えてくるものを受容し、理解し、そこから現れる現象に対

して悩みながらも、工夫し対峙していくことが、援助技術を向上させ、さらなる学習への意欲を高めることにつながる。その一連の行為は、ボランティア活動を継続させることにより保障されるものであるといえる。

3) 支援の方向性 その②

－ 支えられながらボランティア活動を行うことの重要性

対人援助実践は、その活動に確実な正解がなく、何より利用者個々の生活や文化、あるいは抱える事情が異なるため、支援の形は十人十色でなければならないところに難しさがある。

それだけに対人援助において求められる役割は非常に高度なものであり、取り組みがいのある仕事であるといえるが、援助者がジレンマや葛藤や無力感を抱えやすいのも事実である。

そのため、援助者本人が安心して葛藤状態と向き合えるために、現場実践においてはスーパービジョンが、現場実習においては実習指導担当者とのフィードバック(振り返り)が、そのセーフティネットの役割を果たしている。

対人援助においては、どれだけ適切なアセスメントを行い、どれだけ効果的な支援が計画的に実施されるかと同じくらい、実践を振り返り支援効果を測定する「評価(振り返り)」が重要となる。事後におけるこうした振り返りが、援助者の対人援助の質とモチベーションを向上させていくのである。

一方、学生のボランティア活動の多くは、学生自身が活動の参加自体をゴールと認識しやすいだけでなく、現場側でボランティアに対する振り返りやフィードバックの機会を意識的に持つところはそう多くないため、ボランティア活動で貴重な体験をしても、意味のある認識や大切な気付きに至りにくい面を持つ。前述のように、継続ボランティアを続けていくと、関係を深める利用者やスタッフ、所属する施設や団体に対する学生個々の思いは募り始めるであろうし、場合によっては利用者やスタッフとの関係に行き詰まりを感じることも予想される。もしその際に、適切に自己開示ができる場所、気持ちを受け止め、気付きを促し、気持ちを支えてくれる人の存在があれば、学生たちは安心して実践活動を振り返り、かかわりの修正や視点の切り替えを図りながら、無我夢中の試行錯誤の中でもボランティア活動を続けて行くことが可能となるであろう。

こうした効果も鑑みて、学生たちのボランティア活動を支える場所や仕組みづくりについても検討して行きたいと考える。

4) 最後に

筆者はここ10年弱の間、精神保健福祉士コースの授業の一環として、2年次前期に精神障害者の就労支援施設での体験実習を実施している。当初は一人1回限りの実施であったが、その学びがあまりにも表面的である印象を受けたため、現在は2回(週に1回毎)に増やし実施している。

たった1回増えただけでも、次回があることは学生たちにとっては体験に大きな違いが生まれたようで、一度きりの時にはなかった自己の姿勢の振り返りや次回への抱負、初回との姿勢の違いを見つけるための工夫などの記述が多く見え始めた。

この経験から、継続した活動の場合、活動時以外でも、彼女たちはその実践について意識し続けていることがわかり、彼女たちの活動に対して指導者側の適切なリアクションやサポートさえあれば、不安ながらも決してボランティアを拒むものではないことなどを実感した。

学問基盤が社会福祉学であるから学科としてボランティアに努めなければならないといった決まりはない。しかし、非常に身近なところに、対人援助の力をつける素材があることも事実である。その素材を効果的に活用するためには、学生たちに単に言葉でボランティア活動の参加を促すのみではなく、学科教員も手間隙をかけたかかわりや支援、あるいは環境整備への取り組みが大切のように感じる。

馬場ら(2005)は、学生がその活動を通して何を感じどう成長したのかを評価し共有するシステムが学生の自己効力感や意識を高めるとしている。つまり、教員はボランティアの活動先の紹介のような入り口的な役割だけでなく、ボランティア活動開始後に指導的役割を担うことが、活動に対する更なる意欲を学生に芽生えさせるのである。

さらに、学生ボランティアを受け入れている施設や機関との定期的な連絡調整は、学生たちが安心してボランティア活動を続ける上で必要不可欠であることも加えておきたい。

今回のアセスメント作業を踏まえ、当プロジェクトはいよいよボランティア活動のコーディネート作業を具体化させて行く段階に入る。ボランティアの体験は学生自身にも実り多きものであることを周知させつつ、学科内のボランティア文化を更に成熟させるための取り組みを、当プロジェクトを中心に推進させていく所存である。

引用文献

1. 日本学生支援機構「大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」(2009)

2. 森法房「山口県立大学における学生のボランティア活動に関する調査報告」山口県立大学社会福祉学紀要, 第8号, p.51 (2002)
3. 河井亨「ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか 全国大学生調査の分析から」ボランティア学研究, Vol.12, pp98-100 (2012)
4. 荒木剛 山本佳代子 遠山久仁子「福祉学科学生の福祉ボランティア活動に関する実態調査」西南女学院大学紀要, Vol.16, pp71-72(2012)
5. 馬場由美子 島かおり 大宅顕一朗「学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察」永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要, Vol.36, pp160-161(2006)

参考文献

1. 三本松政之 朝倉美江 編「福祉ボランティア論」有斐閣(2007)
2. 松田次生「福祉ボランティアの今日的課題」学事出版(2010)
3. 大勝文仁 山田由佳「自分スタイルのボランティアを見つける本」山と溪谷社(2001)
4. 岡本栄一 監修「ボランティアのすすめ 基礎から実践まで」ミネルヴァ書房(2005)